

テクノロジーを通して、社会を学んできた日々

来住伸子（津田塾大学学芸学部情報科学科 教授）

仕事の内容とやりがい

女子大で情報科学、ソフトウェア開発に関わる科目を中心に教えています。ソフトウェア開発は非常に広い分野ですが、今は Web アプリケーション開発方法と、Web に関わる技術や知識を幅広く教えています。最近の研究テーマは、Web 上の情報を活用した英語学習教材や英語学習環境の構築です。専門分野によらず、教育には教育のやりがい、研究には研究のやりがいがあると思いますが、専門分野が情報科学である場合のやりがいは、短期間で自分の目で成果を確かめられる点があると思います。教育の場合、プログラミングを全くしたことのない学生も、ソフトウェア開発ができるようになって卒業します。研究の場合、小さなアイデアや技術であっても、使う人、ユーザからのフィードバックがあることが多く、技術と社会との関連がわかりやすい分野です。

仕事と家庭のバランス

社会にでてから、仕事と家庭の両立を認めてくれるだけでなく、協力してくれるようなパートナーと結婚を考えたのですが、結局、そのようなパートナーは見つからず、独身です。同じ世代で、同じ分野の男性をみると、パートナーは専業主婦ということが多く、婚活をもっとがんばったとしても、パートナー探しは難しかった時代だったのだと思います。今は、週末にも仕事をしているような生活で、仕事とプライベートのバランスを何とかしなくてはと考えています。締切まで余裕がある、自宅でも仕事ができると思うから、仕事の効率がおちると反省しています。

進路決定のきっかけ

高校では、数学が得意科目で、国語や社会は不得意科目だったので、理系進学を考えました。どのような仕事とまでは、はっきり考えていなかったのですが、親には「高校の数学の先生になる」というように話していたと思います。大学に入ってから、大学レベルの数学や物理を知り、数学者や物理の研究者を目指すのは自分の能力では無理ではないか感じはじめました。その一方で、数学や物理以外の分野の、知識や技術を学んでみたいと思い、当時、新設されて3年目の情報科学科に進学することにしました。コンピュータは企業に普及し、家庭にはあまり普及していなかった時代です。企業への就職がしやすそうに見えたことと、数学や物理の勉強より、プログラミングが面白く思えたことと、情報科学への進路変更に関与した大きな影響があったと思います。

海外留学・勤務を通じて得たこと・得したこと

大学院生として1年、客員研究員として1年、合計2年、アメリカで過ごしました。短期間でしたが、アメリカの研究者やエンジニアのライフスタイルやワークスタイルを実感することができました。たとえば、大学と企業の連携の強さ、業績評価の考え方などを知ることができ、大学を離れて、企業の研究所で仕事してみようと思えるきっかけになりました。国内、海外、企業、大学など、研究者が様々な場所で働いた経験を持つことは普通の時代になり、そういう経験しておく機会を早めに持てて幸運だったと思います。

海外留学・勤務を決めたきっかけについて

大学生時代に、英語の力試しとして応募したサンケイキャリアに合格し、ミシガン大学大学院で一年間勉強しました。大学に入学するまで、理系分野、特にコンピュータ関連分野の勉強には、英語は必須ということを知らず、苦手だった英語は、大学生になってから勉強なおしました。アメリカに着いてみると、やはり、英語で不自由な思いをしましたが、苦手意識は克服しました。

海外の女性研究者の活躍と位置づけについて感じたこと

1970年代半ばから、アメリカの女性はさまざまな分野に進出していったのですが、ソフトウェア工学の分野もその一つです。80年代のミシガン大学の情報コミュニケーション学科には少なくとも一名の女性教授と、数名の若手教員がいたと思います。その後、テクノロジー分野を学ぶ女子学生数が減り、女性教員の占める割合も減った時期がありました。最近、テクノロジー分野への女性の参加を促す活動がまた活発になっています。アメリカの情報系の女性研究者は、企業や個人レベルでは、非常にがんばっていると思います。

<来住伸子(ぎしのぶこ)プロフィール>

公立中学・高校 → 東京大学理科一類 → 東京大学理学部情報科学科 → 東京大学大学院工学研究科情報工学専門課程(修士課程) → 外資系コンピュータメーカー 基礎研究所 → 津田塾大学学芸学部数学科 → 津田塾大学学芸学部情報数理科 → 現職

